

多面的領域としての“個人道徳”の概念と その心理学的研究の展望

首藤 敏元*・二宮 克美**

キーワード：個人道徳、道徳判断、社会的領域理論、道徳性心理学、文化

1. 個人道徳とは

(1) 「生き方」と個人道徳

平成10年に当時の文部省から告示され、現在施行されている中学校学習指導要領（文部省、1998）では、その「第1章 総則」において、「生き方」という語句が4か所登場する。ひとつは教育課程編成の一般方針の中で、道徳教育との関連で「……（略）……生徒が人間としての生き方についての自覚を深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」（傍点は筆者）、二つ目は総合的な学習の時間の取り扱いに関して「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」（傍点は筆者）、三つ目と四つ目は指導計画の作成に関して「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」（傍点は筆者）、「生徒が学校や学級での生活によりよく適応するとともに、現

在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、ガイダンスの機能の充実を図ること。」（傍点は筆者）である。同時に告示された小学校学習指導要領（文部省、1998）においても総合的な学習の時間の取り扱いに関して「生き方」が登場する。

上記の「生き方」には、単なる「進路」という意味を越えて、「かけがえのない自分自身の人生をつくりだす」「自分が主役の自分自身の人生を歩む」という意味が込められているように思われる。このようになった社会的背景には、経済的豊かさと同時に不景気による将来の不透明さ、大人社会の価値観の乱れ、児童青年の短絡的、享乐的な非行傾向の増大等を指摘することができる。近年社会的な論争を生み出している学力低下問題においても、社会における学習の価値の低下および多様な解釈、児童生徒の学習の目的の喪失、これらの結果としての学習意欲の低下が指摘されている（市川、2002）。

「生き方」を自覚し、それを追求しようとする子どもを育成することが現在の学校教育の理念のひとつであろう。自己の生き方は他者や社会との関連なしには確立することはできない。学習指導要領からも、生き方を家庭や地域社会との連携で、子どもの主体的な活動を通して育てていこうとする方針が読み取れる。「生き方」の

* 埼玉大学教育学部幼児教育講座

** 愛知学院大学情報社会政策学部

追求には、単に自分らしさを発揮し、自己の要求を実現させようとするだけでなく、他者の幸福や生き方も尊重する必要がある。この自己と他者・社会の要求とのバランスやそれらの葛藤の解決は道徳発達の根幹にかかわる課題である (Hoffman, 2000/2001)。このように、「生き方」の発達は道徳発達の問題であるといえる。

岡野 (2002) は仏教僧の立場から善となる生き方をいくつか提案している。その中で「智慧をもつことは世の中において幸せに生活するための第一の条件である」(p. 174) と提案している。彼によると、智慧とは単なる知識ではなく、その知識を正しく有効に活用する心の働きである。「有効に」ということは自分にとって有効であるのではなく、自分を取り巻く人間関係、さらに拡大すると宇宙全体が有効にということである。つまり、智慧を持つことは徳につながる。この例に限らず、仏教においても道徳と善い生き方とは同義であるとみなすことができる。

(2) 個人道徳の定義

自分にとっても他者 (集団) にとっても満足のいく意志決定を行うことが「善く生きる生き方」につながる。自己と他者の利益が同時に関与する場面向社会的行動と自己管理がある。家族の介護、臓器提供、ボランティア活動、他人への配慮や思いやりなどは、他者の幸福・福祉を左右するといった道徳的な要素が含まれると同時に、個人の意志も尊重される事柄である。不良仲間とのつきあい、タバコ・アルコール等の嗜好、偏食やレトルト食品の摂取、奇抜な服装や髪型、遊びと勉強の時間配分などは、個人の自由が許されると同時に、直接的に自己の健康を害したり、間接的に親などの親密な関係にある人を不幸にさせたり、自己への社会的な評価を通して個人の社会生活が左右されたりする事柄である。本研究では、このような個人の自由や自己決定権と、社会道徳的要素の両方が含まれる場面を個人道徳 (personal-moral) 場面と呼び、そこでの判断や意志決定や志向性の発

達を個人道徳の発達と定義する。

個人道徳の発達は、自己と社会との関係、もしくは社会的世界における自己のあり方の形成としてとらえることができる。すなわち、個人の欲求を抑制し自己を社会の一部として位置づけたり、人との関係と個人の欲求のバランスを追求したり、人とのつながりよりも個人を優先させたりする個人道徳の個人差は、社会的世界における個人の生き方の問題として考えることができる。

喫煙や飲酒は自己の問題か道徳の問題かに関して議論がある。Tisak & Turiel (1984) はこの種の prudential を個人領域のサブカテゴリーに含め、危険であるが自分にしか影響しない行為として定義した。つまり、基本的には社会が強制すべきではない個人の権限の中に含めたのである。一方、哲学者の多くは個人が自分を守り安全を保つように導く特性を prudence (自愛の思慮) と定義し、人間性を尊重する義務は自分自身の人間性を尊重することを含む (哲学者カント (Kant))、自己を傷つける行為が集団に利益よりも負担を多く生み出すものならば、それは不道徳である (哲学者ベントム (Bentham)) のように、道徳の問題としてとらえている (Berkowitz, Kahn, Mulry, and Piette, 1995)。自分を傷つける、あるいは傷つける可能性のある行為をどのようにコントロールするかは、個人の権限と道徳的義務の両方を考慮すべき問題であるとみなすことができる。つまり、自愛や自己管理は個人道徳の問題である。

Bersoff & Miller (1993) はインドとアメリカの成人と子どもの道徳的推論に及ぼす状況要因を検討する中で、“personal moral” というカテゴリーを使用した。彼らは自発的な社会的行動のカテゴリーとして、他者の期待が伴う行為で客観的義務のあるものを “moral”、他者の期待は伴うが客観的義務のない行為を “social convention”、他者の期待のない個人的な行為であるが客観的義務の伴わない行為を “personal moral”、他者の期待も客観的義務も伴わ

ない個人的な行為を“personal choice”と定義した。Bersoff & Miller (1993) のカテゴリー名は Turiel ら (Turiel, 1983, 1989, 1998, 2002) の社会的領域理論の領域名と類似しているものの、彼らの定義した4つのカテゴリーは領域概念に相当するものではなく、単に行為を分類するカテゴリーである。個人道徳は個々の行為を規定するものではない。個人道徳の発達、多元的な見方を必要とする複雑な社会的場面での具体的な判断と行動の背景にある私たちの心理的枠組みの発達である。Turiel らの社会的領域理論でいう領域調整の発達の一側面であるといえる。

2. 多元的な道徳的自律の発達

私たちの社会生活には個人としての意志決定に影響する多くの要因が埋め込まれている。特定の人への思いやりが不公平を生まないか、個人の自由な決定で他人がいやな気持ちになっていないか、個人の嗜好による行為が自分の身体と心を傷つけないか、他人に配慮するあまり自分の要求が犠牲になっていないかなどである。私たちの生活はいくつもの対人関係から構成され、思いやりも公正さも求められる。

個人道徳は、字義通り、多元的な道徳発達を意味している。明らかに道徳的な判断が求められる場面はむしろ少ない。個人の自由と権利の尊重と、他者や集団の福祉や正義のバランスが常に求められる。私たちの日常生活での意志決定には、常に個人道徳が問題になっているといえる。社会的判断、意志決定、行動に関する社会的領域理論 (social domain theory) は、私たちの社会生活と意志決定が多元的であることを前提とする心理学理論である。本論文の理論的根拠は領域理論にある。以下、社会的領域理論の概要を示す。詳細は、Turiel らのレビュー (Laupa & Turiel, 1995; Smetana, 1993/1995; Tisak, 1995; Turiel, 1983, 1988, 2002) と首藤・二宮 (2003) に示されている。

(1) 社会的領域の定義

異質な推論や志向性を作り出すものが、私たちの所有する質的に異なる思考、つまり領域 (domain) 概念である。社会的領域概念は人の社会道徳的判断と志向性を作り出す認知の枠組みである。

社会的領域理論 (Turiel, 1983, 1989, 1998, 2002) では、道徳領域 (moral domain)、社会領域 (societal domain)、心理領域 (psychological domain) を区別する。心理領域には下位領域として個人領域 (personal) と自己管理領域 (prudential) を区別することがある。Nucci (1981) が心理領域の個人領域をとり上げ、それを道徳と慣習の規則には縛られない個人の自由な意思にもとづく領域として研究したことから、心理領域は個人領域と呼ばれることが多い。

① 道徳

道徳領域は、正義の概念を土台に構成される領域である。道徳領域の行為や規則は、人が他者や社会にどのように行動すべきかという指令性を含んでおり、他者の福祉、信頼、公正、責任や権利に関係する。他者の福祉、信頼、公平、責任や権利に関係した場面でこの領域思考が働く。攻撃行動に代表されるように (攻撃は自動的に人を心理身体的に傷つける)、道徳領域の行為には善悪を規定する要素が内在されている。道徳領域の行為は他者の期待や規則、権威者の指示・命令とは無関係である。「絶対にしてはいけない」「決して許されるべきではない」という判断の背景には、この道徳領域の思考が働いている。

② 慣習

慣習領域は家族や仲間集団、および学校・会社などの社会組織を成立させている要素の理解、つまり社会システムの概念に基づいて構成される。この領域には、社会集団に参加しているメンバー間の関係を調整する行動上の取り決めに関係した行為が含まれる。慣習の行為は、集団の秩序を維持するものとして成員相互の一致した意見と期待に基づいて行われる。例えば、

学校・会社の制服や登校・勤務時間、目上の人
の呼び方、宗教儀式、食事のマナー、礼儀作法、
地域のしきたりなどがある。慣習領域の行為は、
道徳領域の行為とは異なり、行為自体に善悪を
規定する性質を持っていない。慣習による行為
は恣意的であり、文化や状況に相対的である。

慣習の行為は社会的文脈に相対的であり、成
員の意志の統一によって変更可能なものである。
一方、道徳領域の行為は意見の統一によつて
変更できるものではなく、またその善悪は状
況や文脈を超えて普遍的に適用される。文化や
社会が異なれば違った慣習が存在する。しかし、
文化、社会、時代が異なっても、道徳は普遍的
に存在する。ただし、行為が他者にどのような
影響を与えるのかといった仮説的推論 (informa-
tional assumption) には時代や文化の影響
があるため、表面上は道徳が時代や文化に応じ
て変化するように映る出来事もある。男尊女卑、
奴隷制、体罰などである。奴隷制が許されてい
た時代においても、他者の福祉や権利と関係し
た道徳的な規制と道徳的な思考様式は存在して
いたと考える。

③ 心理領域 (個人領域/自己管理領域)

心理領域は心理的な統一体としての自己と他
者の概念化に基づいて構成される領域である
(Smetana, 1982)。この領域には、行動の影響が
自分だけにあり、自己の統制下に置かれる行為
が含まれる (Nucci, 1981)。これらの行為は、社
会秩序の維持や善悪の判断には束縛されないも
のである。また、社会的に調整されてはいけな
い、および道徳に規定されるものではないとい
う個人の自由意志に基づくものである。例えば、
趣味、友人の選択、サークル活動や容姿などプ
ライバシーに関係した行為や自己の身体管理に
関係した行為である。個人領域の規則は、自己
の安全管理上を規制するものとして存在してい
る (例えば、「自転車に乗るときにはヘルメット
を着用する」、「ストーブは熱いからさわらない」
「雪の屋外に出るときには手袋をする」)。これら
の規則は自己管理の規則 (prudential rule) と

呼ばれている。

(2) 社会的領域概念の発達

領域概念は、個人と環境との相互作用に基づ
いて認知的に構成される。社会的経験はひとつ
ではなく、多元的な社会的世界の側面が質の異
なる経験をもたらす。その異なった経験にもと
づいて、個人は多元的な領域概念を構成し、こ
れを利用して、社会的出来事を認知し、判断し、
評価する (Turiel, 1983, 1989, 2002)。3つの領
域概念は幼児期の子どもにおいても認めること
ができ、また各概念と対応する社会的相互作用
の質の違いも観察されている (Laupa & Turiel,
1995; Smetana, 1993/1995; Tisak, 1995;
Turiel, 1983, 1989, 2002)。わが国においても質
の異なる領域概念の妥当性が確認されている
(首藤・二宮, 2003)。

(3) 領域混合と領域調整

現実の社会的世界には、複数の領域の要素を
持つ場面や出来事があり、その判断や行動は人
によって、また個人内でも状況によって異なる
のが現実である。たとえば、向社会的行動は自
由意志に委ねられるという個人領域の要素と他
者の生命の救助という道徳領域の要素を併せ持
つ。乗車の際の割り込み行為は社会的秩序を乱
すという慣習的な側面と同時に、待ち時間と乗
車優先の公平さという道徳的側面も持っている。
職場で男性が女性の身体的魅力を賞賛する
ことは、現代では、性的人権侵害として判断さ
れる。タバコは個人的な嗜好の問題であると同
時に、自己と他者の身体を害する行為としても
認識される。社会的領域理論はひとつの領域に
おさまらない場面についても有効なアプローチ
を提供する。

Turiel (1989) は、領域混合のタイプとして次
の3つをあげている。(a) 個人内で2つ以上
の領域にまたがって判断される行動、(b) 本
来は慣習領域の行為であるが2次的に道徳領域
の特徴を所有している行動 (second-order phe-

nomena)、(c) 人によって分類される領域が異なる多面的な行動、である。先の向社会的行動や割り込みの場面は (a) に含まれる。(b) の2次的な性質の情報源は、親や教師による状況に随伴しない言葉かけを通してつくられる。たとえば、「お行儀良くしないとお母さんはとっても悲しいわ」というように、母親自身が犠牲者となり、道徳領域の要素が言語・非言語的に伝達される。この働きかけは大人の期待や規則に子どもを従わせることを目的としている。(c) の多面的行動の例としては、同性愛、ポルノ雑誌や人工妊娠中絶など単純には判断のできない複雑な社会的行動があげられる。これらの行動は、人によっては個人の自由として判断されたり、道徳的な逸脱行為として見なされたり、または社会の変化に伴う慣習として分類されたりする。

このような領域混合の例は、3つの領域知識や概念の中間的な領域が存在することを意味しているのではない。社会的認知の知識領域としては道徳、慣習、個人の3領域しかないと仮定する。領域混合は、多元的な社会的志向性により、人が複数の領域概念を使用して場面を解釈し、判断し、行動を決定することを表しているのである。このようなひとつの領域からの思考を超えた解釈や判断は、領域調整(domain coordination)といわれている。混合領域の行動の判断と選択に際して、個人の思考の中で各領域の概念が調整されるのである。

(4) 概念と信念の区別

胎児に人としての生命を認めるかどうか、同性愛を自然律からの逸脱と見なすか、個人の性的志向性と見なすかは、人によって意見が異なり、また個人内でも判断が一貫することは少ない。このような曖昧な社会的出来事は、人が漠然と所有している信念によって作りだされる。この信念は、現実について見聞きすることによって得た憶説のことである。たとえば、「割礼を儀式と見なすかどうか」というのは信念の

問題である。「儀式はそれを所有する集団の生活を成立させる重要なものである」という考え方は、領域概念に基づいている。領域概念が明確であるのに対し、信念には不確かな性質がある。社会的領域理論では、各領域の概念と、現実から引き出される憶測 (informational assumption) とを区別する (Turiel, 1983, 1998; Wainryb & Turiel, 1993)。

道徳領域の概念は、社会的相互作用の経験から、行為に内在された要素を子どもが抽象することで認知的に構成される。子ども同士のいざこざはどのような文化においても見られるものであり、文化が異なっても同じような概念が構成される。一方、信念は宗教や教育の影響を受け、文化、時代による差異が大きい。その結果、社会的場面によっては、その解釈と判断、行動に文化差が認められる (Turiel, 1998; Turiel, Hildebrandt, and Wainryb, 1991; Wainryb & Turiel, 1993)。

「胎児は人の命である」という信念は、中絶を殺人と同一の領域 (道徳) と見なす判断を導く。「胎児に人の命はない」という信念は、中絶を個人の選択の問題 (個人領域) として見なす判断を導く。「同性愛は遺伝的な根拠がある」とする医学研究は、「同性愛は性的倒錯である」とする信念から「同性愛は個人の特性である」とする科学的な知識へと変え、同性愛を個人の性的指向と見なす判断をもたらすだろう。「エイズウィルスは空気感染する」という憶測は「エイズ患者を隔離する」ことを正当化する。しかし、「エイズウィルスは空気感染どころか、肌と肌の接触程度では感染しない」と示す医学的事実は、先の信念を放棄し、「エイズ患者の隔離」を人権侵害 (道徳領域) として見なす判断を導くであろう。事実、科学と教育の進歩により、さまざまな憶測や信念が修正、破棄されてきたことは明らかである。

(5) 社会的領域理論の可能性

領域概念、領域調整、領域概念と信念との区

別に関する観点から、子どもの社会道徳的判断だけでなく、子どもの社会的世界の認知について広く心理学的に検討することができる。また、文化および文化の対立についての理解も検討可能である (Laupa & Turiel, 1995)。

歴史的、宗教的に抑圧されてきた人々や、階層化社会において従属的地位にある人々の領域概念、特に道徳的不平等が慣習的に行われてきたことへの意識、このような意識と自己決定意識 (個人領域) との葛藤なども検討されている。伝統的な階層化社会に住む人々にも、欧米社会で見られる質的に異なった領域概念が存在すること、しかし自己決定権意識のあり方が異なることなどが見出されている (Turiel, 1998, 2002; Wainryb & Turiel, 1994)。

(6) わが国における道徳的自律の発達

権威は社会的世界の中に一貫して存在する社会的関係の要素である。子どもは大人の権威を一方的に受容するのだろうか。あるいは、一方的に反発するのだろうか。

首藤・二宮 (2003) は幼児と児童の親権威概念を検討した。そして、幼児も児童も親の支持命令に一方的に受容的にも反抗的にもなるのではないことを示した。すべての幼児は、他者を心理身体的に傷つける恐れのある場面では、親の攻撃の許容を拒否した。ほとんどの幼児が自分の身体を害する恐れのある場面と向社会的場面においても、親の許容を拒否した。これらの結果は、幼児が、道徳的逸脱、自己管理の違反、および他者への冷淡な態度を指示するような親の権限を認めていないことを示している。つまり、幼児でさえ、「大人は偉い。だから大人のいうことを聞かなければならない」といった大人への一方的な服従を示さないことを意味している。また、母親は子どもの道徳的逸脱場面では親の権威を発揮し、子どもの自由な行動を制限しようとしていた。自己管理場面では、自分の体への悪影響という自己管理の要素に気づかせると同時に、子どもの意志を重視したかかわり

方をすると考えていた。向社会的場面では道徳的な要素よりも子どもの意志を重視したかかわり方をとると考えていた。母親の権威の発揮の仕方は、子どもの逸脱場面の性質に即したものであり、幼児の領域概念と領域調整にとって貴重な情報源となるものであった。同様な結果は、教師権威についても認められた。

首藤・二宮 (2003) による一連の研究結果は多元的な道徳発達を支持している。道徳は、Piaget (1932/1957) が考えたように、権威に服従した他律の段階から自律の段階へと一次的に発達するのではない。幼児期の子どもでさえ多元的な (質の異なる) 社会道徳的志向性を発揮する。大人も多元的な志向性から子どもに関わろうとする。それは子どもに受け入れられることもあれば、反発されることもある。子どもと大人の志向性は一致することもあれば衝突することもある。このような相互作用の中で、子どもも大人も社会的世界に適応した領域概念を発達させるのである。

首藤・二宮 (2003) の研究の意義は、道徳、慣習、個人といった質的に異なる領域概念がわが国の子どもにも認められることを示し、社会道徳的発達が多元的であることを実証したことである。換言すれば、従来、西欧社会と日本社会の道徳観を「個人主義的-集団主義的」「相互独立的一相互協調的」「規律主義-気持ち主義」などの二分法でとらえようとした研究に対して、それらのいずれの志向性もわが国の幼児児童の社会的認知の一部として存在することを示した点にある。

首藤・二宮 (2003) の研究は、間接的にはあるが、わが国の道徳発達に特徴的な傾向も指摘している。すなわち、① わが国の児童青年は全体的に慣習的な思考 (状況依存的な価値判断) を強く働かせる傾向にあること、② 他人への向社会的行動と自己を危険にさらす行為といった、個人道徳の場面において、わが国の児童青年は個人の自由意志と権限の及ぶものとして解釈する傾向にあること、③ 青年は慣習と自己

管理の場面で教師の権限を認める傾向が低いこと、④ 幼児の保育者（親と教師、保育士）は慣習場面、向社会的場面と自己管理の場面で、援助を主体とした間接的な働きかけを行う傾向が強いこと、また子どもの意志を尊重する態度をとる傾向が強いこと、である。① はインドの青年と成人が道徳的な思考（状況要因とは独立した価値判断）を強く働かせること（Miller & Bersoff, 1995）と対照的である。質的に異なった領域概念自体は文化を越えて認められるものの、各領域概念の機能（領域調整）は文化的文脈の影響を受けると思われる。

わが国の若者の思いやり意識が諸外国と比べて“異質”であるとの報告（中里・松井、1997）、若者たちの自由感が肥大し、新エゴイズムが蔓延しているという提言（千石、2001）などを根拠に、わが国の青少年の規範意識と倫理観の低下を嘆く声も聞かれる。これらの悲観的な見方は道徳発達を他律から自律へという一次元で見ていることから生じる。領域理論では、社会的規範が3つの領域概念から多角的に理解、判断されるととらえる。したがって、規範意識も多角的になる。道徳的な規範意識と慣習的な規範意識に加え、「社会から制約されてはいけない」個人の自由という意識、および自分が自分に課した自己管理上の規範という意識もひとりの個人の中に同時に存在すると考える。首藤・二宮（2003）の研究は、Turiel たちによる一連の研究結果と同様に、多角的な道徳発達の芽が幼児期の子どもに見られ、小学校の学年とともにより明確になることを示した。子どもは社会生活を送る中で、道徳的自律を多角的に発達させつつあると見ることができるだろう。

しかしながら、中学生から高校生にかけて、道徳的場面と慣習場面での教師権威を正当とは見なさない傾向が強くなっていった。また自己管理場面での教師権威は全体的に低いものであった。私たちの社会にはどのような集団であっても何らかの対人関係が存在する。その関係の中には役割や権威という慣習上の要素が埋め込ま

れている。学校という社会的状況のなかにも、互いの幸福を尊重し公正にふるまうという道徳領域の要素、上下関係、権威、役割という慣習的な要素、自己決定という個人領域の要素が同時に存在する。中高生たちが学校という社会的場面で教師の権威の正当性を低く見積もっているならば、首藤・二宮（2003）のデータの一部は彼らの個人領域概念の肥大化を示しているのととらえることができる。青少年の“自己決定主義”（千石、2001）を示唆するデータとも言えるであろう。

3. 文化、社会的文脈と道徳発達 — 日常生活の個人道徳 —

首藤・二宮（2003）の研究は、日本という文化的文脈の中での社会道徳的判断を扱ったのではなく、領域に典型と仮定された場面での判断を扱い、社会的領域理論の妥当性を検討した。しかしながら、彼らの研究結果には文化的文脈の影響も反映している。ここでは、道徳発達に関する文化心理学的研究を概観し、文化的文脈の中での個人道徳の発達の文化依存性と文化普遍性を考察する資料とする。

(1) 文化と道徳発達

① ジェンダー、自己と道徳発達

社会道徳的志向性に関する心理学研究は Gilligan (1982/1986) による男性とは異なる女性の道徳発達の研究に始まる。Gilligan (1982/1986) は、道徳性発達には2つの筋道があり、男女では発達が異なると仮定する。Kohlberg (1971/1985, 1969/1987, 1984) が対象にしたのは、男性の道徳発達と見なし、「もう一つの」発達のプロセスに関する理論を提示した。Kohlberg の道徳性においては、葛藤の解決は公正さに求められ、あらゆる状況に適用されうる形式的・抽象的な解決で、普遍的に正しい解決が求められる。一方、女性は現実の文脈に依存し具体的な状況に沿った形で、かかわりのある他者

に責任を持つという観点から解決を求める。このような女性の解決方法は、Kohlbergの段階では段階3と評定される。事実、女性においては段階3が多いことが報告されてきた(山岸、1995)。Gilliganは、道徳性を世界との関係の持ち方、世界における自己の位置付け方と関係したものであると考え、道徳的志向という用語を用いる。そして、男性に優位に見られる「公正さの道徳性」と女性に優位に見られる「配慮と責任の道徳性」を区別した。Gilligan & Attanucci (1998)は、男性と女性の実生活上の葛藤を面接調査し、男性の葛藤経験のうち約65%が「公正さの道徳性」に含まれるものである一方、女性の葛藤の約70%が「配慮と責任の道徳性」に関係したものであることを報告している。

Gilliganの理論が発達心理学的に意義を持つ点は、男女による道徳的志向の形成に関する仮説である。Gilliganによると、私たちは乳児期から2つの関係を持っている。1つは不平等の関係、もう一つは愛着の関係である。大人に依存しなければならぬ乳児は自分が力を持たないこと、無力なことを感じる。その時の、自分は他者と違って小さくて何もできないという経験が不平等の関係である。不平等の関係の中で、子どもは平等と独立へと発達しようとする。一方で、乳児は、愛着関係の中で、能動的に他者に働きかけ他者から反応を引き出すことができるという効力感を持つ。私たちは乳幼児期から2つの関係の中で生活するが、性によってこれらの関係のあり方が異なる。女兒は愛着の対象である母親と同一視するため、男児に比べ愛着の関係が優位となる。一方、男児は、母親を愛着対象としながらも、同性の父親と同一視し、不平等の関係を優位に経験する。そのため、男児は不平等の関係から脱したという欲求を持ち、分離・独立することが自己の形成にとって重要になる。Gilliganによると、私たちは不平等な方に直面する時には、「ずるい」や「正しくない」という感覚、つまり公正さの道徳的志向が強ま

り、愛着の関係の中では、愛する者から遠ざかることを避けるために、配慮と責任の道徳的志向が強まる。乳幼児期から2つの関係にさらされることで、2つの道徳性が学ばれ、児童期、青年期以降に確かなものとして、自己の志向性として確立していく。Gilliganの理論は、愛着と道徳との関係、自己と道徳の関係を考える上で大変興味深いものである。しかし、まだ発展途上の段階である(山岸、1995)。

② 日本人の「気持ち主義」(東、1994)

ジェンダーの問題は文化的文脈を抜きには明らかにすることはできない。Kohlbergの道徳発達理論は世界的に受け入れられているものの、さまざまな文化比較的研究をとおして、方法論や理論が文化的に一面的なものであることも指摘されている。わが国では、山岸(1995)がKohlbergの研究を追試し、日本人はアメリカ人と比べ、段階3に到達するのが早く段階5以上が表れるのが遅いことを見出した。日本では小学3年生程度から段階3が主流になるが、大学生になっても段階4が中心である。山岸(1995)はこの結果を日本人の道徳発達がアメリカと比べて遅く不十分であるとは解釈せず、Gilligan(1982/1986)も指摘したように、文化的にみてKohlberg理論が一側面しかとらえていないと主張している。

東(1994)は日米母子研究のしつけ方略調査を通して、日米の母親のしつけ方略と道徳発達の関係について文化心理学的な仮説を立てた。つまり、子どもがよくないことをしているのをやめさせようとするとき、日本の母親はよく気持ちや感情を引き合いに出す「気持ち主義」が際だっていた。いけないと叱るときに親が何をもち出してくるかは、子どもが自分の行為のよい悪いを判断する根拠の形成と関係をもつ。やって良いか悪いかを考えるとき、気持ちや感情で説明されてきた子どもは、自分が善し悪しを判断するようになったときも、その行為が人の気持ちを傷つけるかどうかを判断の根拠とするだろう。つまり、道徳的判断の際、日本的な

しつけのもとで育ったものは人間関係のおよび感情的な配慮を強く働かせ、アメリカ的なしつけのもとで育った者は律法的ないしそれを内面化しての原理的な考え方に身を置くであろう。

東 (1997) はこの文化と道徳的判断との関係を「道徳スクリプト」という概念を持ちだして検証した。つまり道徳的判断を行う際にどのような情報を必要とするか、行為者の感情あるいは受けた罰の程度等、どの側面に着目するかをとおして、道徳的スクリプトの文化的差違を明らかにした。そして日本人の道徳スクリプトは人間関係や気持ちの流れによって綴られるのに対して、アメリカ人のそれは行為や事件の連鎖が主題であり、それが「正しさ」の基準に照らして理解されることを示した。

道徳スクリプトの違いは Turiel らのいう情報推論の違いでもある。仮説的情報の差違は道徳的判断の差違をもたらすものの、道徳概念の差違を示しているとはいえない。したがって、東 (1997) の研究結果は、日米の大学生が道徳的判断を行う際の情報推論の違いを証明しているだけである。

③ 文化的自己観と道徳 (北山、1997a, b)

北山 (1997a, b) と Merkus & Kitayama (1991) は文化的自己観という概念を提唱している。これは「ある文化において歴史的につくりだされ、暗黙のうちに共有されている人の主体の性質についての通念」(北山、1987b, p. 29) である。そして、文化的自己観は「物事に意味を与え、それらについて考え、感じ、あるいは実際に行動する際の『準拠枠』をその文化で生きる人々に提供する。このような文化的準拠枠は、魚にとっての水と同じように、暗黙のうちに受け入れられ、通常、ある文化の中に「浸って」いる限りは疑うことすらままならない。つまり、文化的準拠枠とそれを構成する文化的自己観は、多くの場合、それとして認識されることはまれであり、その意味で暗黙、かつ不可視的であるといえる。」(同、p. 37)。

文化的自己観として、相互協調的自己観と相

互独立的自己観が区別されている(北山、1997a, b; 北山 & 唐澤、1995; Markus & Kitayama, 1991)。独立的自己観は自己を他者から分離し、自己を独自の実体としてとらえる。西欧とりわけアメリカの中産階級の人々に典型的である。協調的自己観は他者と結びついた対人関係の一部として自己をとらえる。日本を含むアジアの社会の人々において一般的である。文化的自己観は、自己と他者・社会との関係をどう捉えるかという自己の定義だけでなく、認知、感情、動機づけ、価値観などのさまざまな心理プロセスに作用する。

さまざまな人の心理のプロセスは、集団の中で歴史的に蓄積されてきた慣習的な意味構造からなる文化への適応を通じて形成される。そして、いったんそのような心理のプロセスが形成されると、人は社会的場面の中で文化的慣習や意味体系を再生産し、それによって文化は将来へと持続する(北山、1997a)。つまり、私たちの心の働きは文化の中で形作られると同時に、文化を作り出すのである。子どもの道徳発達にとって、家庭、学校や地域社会が、この心と文化の相互構成の場であると考えることが重要である。

文化的自己観に関する研究は主に社会心理学の分野で広く研究されている。内田・北山(2001)は日本の大学生を対象に思いやり傾向が相互協調的自己観とプラスに相関するが、相互独立的自己観や自尊心とはほぼ独立であることを見出した。彼らは、思いやりが日本的な自己観である相互協調性の下位概念としての社会的関係への情緒的関与の指標であるとみなしている。

文化的自己観は文化の中核的な特徴を表すキー概念である。しかしながら、相互独立と相互協調の二分法により社会や個人を分類できるものではない。このことは Turiel らの研究からも明らかである (Turiel, 1998, 2002; Wainryb & Turiel, 1994)。高田 (1999, 2001) は文化的自己観を社会的現象のひとつであり、必ずしも個人の認知的表象ではないととらえた。しかし、

社会的表象は個人の認知的表象に反映され自己認識に影響する。その反映の程度により、同一文化に属する個人の文化的自己観の体験度は異なると考えられる。高田(1999, 2001)はこの観点から文化的自己観尺度を作成し、その発達の検討を行っている。同一の個人内に両方の自己観が存在することを前提として自己観尺度を作成した点は自己観に関する文化心理学を進展させる試みだと考えられる。

文化心理学的見地から日本社会の道徳は社会的相対主義に特徴づけられるという(北山, 1997a, b; 北山・唐澤, 1995)。北山(1997b)によると、役割志向と情緒的態度の重視の両者は、日本における道徳的原理を構成していると考えられる。この関係性に重きを置く道徳は、近年 Shweder ら(Shweder, Mahapatra, and Miller, 1987)が義務志向型と呼び、インドにおける研究で同定し、個人(特に、個人の権利)志向型の欧米道徳と区別してきたものに対応している。欧米における道徳的原理の主体は公正・福祉の原理などの普遍的原理である(Kohlberg, 1971/1985)。このような道徳は、善とは何か、そしてそれはなぜかという論理的基準を提供する。ここでの道徳とは、そこから判断を演繹できる思考の枠組みであると考えられる。罪はこの普遍的原理に背くことから生じる(村井, 1967)。しかし、日本の道徳的原理は、義理と人情に示されるように、社会にある対人関係の様式の一般化である。これは善への倫理的基準ではなく、善と考えられる生き方の集合を示している。そして罪とは自分と関係のある人に恩を返せない、あるいはその恩に背くことから生じる負い目の意識である。つまり、罪は普遍的原理に対して定義されているわけではない。むしろある特定の関係性の中で、役割を果たさなかったり、情緒的態度をとれなかったりした結果として生じてくる「申し訳なさ」や「恥」に代表される状況依存的な感情である。加えて、ある関係性の中で、役割遂行と情緒的態度のいずれが道徳判断の主要な次元になるかすらも、状

況依存的であることが多い。どちらも捨てがたい場合、「義理と人情の板ばさみ」が生じることになる。つまり、日本における道徳観は社会的相対性によって特徴づけられている。

以上、簡単にまとめると、文化心理学では、道徳とは、文化的に形成された「善い生き方」観、つまり主体としての自己観の違いであると考えている。

④「義務の道徳」と「権利・公正の道徳」 (Shweder, Bersoff, Miller)

Shweder ら(Shweder, Mahapatra, and Miller, 1987)はアメリカ人は権利の道徳(right-based morality)、インド人は義務の道徳(duty-based morality)が強いと考えている。インドでは、食事、衣服、呼称、性役割の違反はすべて、状況を越えて悪いと判断される。このように、インド人はすべての社会的行為に対して道徳的な志向性を示す。彼らは、このデータを西欧社会のデータと比較して、インド人には慣習的な思考は存在しないと主張している。

Miller & Bersoff (1995)は文化の違いという社会的文脈の差違が道徳観の違いを生み出すことを、インドとアメリカの成人を対象に検討している。彼らはアメリカとインドの中流階級に属する成人40名ずつを対象に、それぞれの家族の理想と思える役割を語ってもらい、またなぜそれを理想と思うのかの評価も求めた。インドでは、「夫の反対にあい大学の職を辞した妻」などの自己犠牲的な献身の行為が語られることが多く、家族の役割行為と義務とを関係づけていることが示唆された。一方、アメリカでは、「親にカードを送る」「親を病院に連れて行く」「子どもを膝にのせて歌ってあげる」という、家族への愛情表現と支援に関連した行為が語られることが多く、家族の役割に付随した行為というよりはそれぞれの個人の選択としての行為が中心であった。次に、家族内の「献身」と「愛情/心理的支援」の物語を作成し、主人公の行為がどれくらい重要であるか、主人公はどれくらい満足しているか、およびその理由について質問

を行った。その結果は、アメリカ人は愛情と心理的支援の行為をインド人よりも重要であると判断したのに対し、インド人はアメリカ人と比べて献身的行為と愛情の行為の両方を重要であると判断した。これらの結果から、彼らは、アメリカ人が献身的行為よりも愛情と心理的支援に重点を置くような対人的な道德律をもっている一方、インド人はどちらの価値も認めるが、より献身に重点を置くような対人関係の道德律をもっていると考えている。満足感に関する結果は、インド人がアメリカ人よりも満足感と献身を強く関係づけることがわかった。満足の原因の結果として、アメリカ人はインド人よりも献身場面での評価の際、義務を果たした満足感と、犠牲にした自己の欲求に重きを置き、愛情と心理的支援場面での評価の際には、関係の強化に着目することがわかった。インド人の方は、献身場面での義務を果たした満足感と、献身場面および愛情/心理的支援場面での家族の幸福に関連した満足感を強調することがわかった。

このように、アメリカ人は対人関係の責任性を、関係を強化させる個人的な意志決定にもとづくものと考えている。つまり対人関係の責任は個人道德のひとつである。アメリカ人は献身場面での義務を果たした満足感を予測することもできるが、満たされなかった自己の欲求に着目し後悔の念を持つこともある。彼らによると、この判断も個人志向的なものの一部である。インド人では、対人関係の責任性は個人の意志決定というよりも、役割に付随した義務であり、社会的に規定されたものである。インドでは自己は相互依存的な社会の一部であり、個人の意見は社会全体の要求に対して副次的なものである。そのため、家族であっても個人の野心を制御することが強く求められる。Miller & Bersoff (1995) は、これらの結果が個人主義と集団主義という文化的文脈の差違であると考えている。自己概念と道德は両方とも文化的文脈の中で獲得されると考えるのである。

Turiel ら (Turiel, 1998, 2002; Wainryb,

1995; Wainryb & Turiel, 1994) は、Shweder と Miller らの研究結果を、領域調整の観点から反論する。インド人とアメリカ人の道德概念が異なるのではなく、現実についての推論上の仮定 (informational assumption) が異なる。つまり、インド人が「死後の魂」の存在を信じるように、「死」に対する信念が異なるのである。この信念としての仮説的推論が異なるため、具体的な状況での領域調整が異なり、意志決定も異なってくる。

Wainryb (1991, 1993) は、人が福祉、権利、公平について同じような概念を所有しているものの、仮説的推論が異なれば異なった判断を示している (体罰、中絶、死後の魂についての仮説的推論と判断)。つまり、人は概念を否定する情報は拒否するが、自分とは反対の仮説的推論 (信念) が存在することは受け入れること、領域概念には文化による差異はほとんどないこと、仮説的推論は文化によってかなり異なることが示された。

また、対人関係の責任という多面的な場面では、人によって判断と意志決定が異なってくる。この差違は社会的階層の明確な社会では、支配的な地位にある者と従属的な地位の者との判断の差違として反映されてくる。この点は Druze 社会の成人を対象に明らかにされている (Wainryb & Turiel, 1994)。Turiel らによると、文化的文脈の違いは判断の差違を生み出すものの、道德概念は文脈の違いを超えて共通である。Turiel らの立場に立つと、文化間の衝突や個人間の対立は起こりうるものであるが、対話による対立解決が可能であり、またそれによって個人と社会の道德観の発達が促される。

(2) 個人道德の発達の文化的普遍性と文化依存性

① 道德と自律の文化依存性と文化普遍性

人は個人主義的であると同時に、相互依存的である。どのような文化にあっても、人は道德性と自律性を同時に発達させる。この道德と自

律の発達とは他者との相互作用という社会的文脈の中で形成される。仲間との葛藤は、正当な主張をするという自律性の要素をもつ、同時に他者に公正で思いやりがあるかという道德性の要素をもつ。大人との葛藤場面には、「自分で決める」という個人の自由裁量の感覚と、権威の尊敬という道德的要素がある。このような他者との葛藤が道德と自律を発達させる環境となる (Killen & Nucci, 1995)。

Killen & Turiel (1991)、Killen & Sueyoshi (1995) と Killen & Smetana (1999) はそれぞれ幼稚園場面、日本の保育所場面、家庭場面において、子ども同士および子どもと大人との葛藤を観察し、他者との葛藤には道德的要素、慣習の要素と個人領域の要素のすべてが存在していること、大人は子どもが複数の要素を調整するよう促すことを見出した。そして、日本の大人は子どもの葛藤に介入するときに命令表現をほとんど用いないこと、仲間との自発的な相互作用と場面での判断および推論を促そうとすることが特徴的であると報告している。自律性と道德性は日本とアメリカの両方の文化に存在し、文化差は道德性と自律性の調整の仕方にあると考察している。

社会的相互作用をとおして、領域概念が形成されることは領域理論の根幹に位置する前提である。重要な点は、個人の自由や自己決定にかかわる個人領域の概念も他者との相互作用によって構成されることである。他者からの抵抗にあたり、他者と交渉をしたり、大人からの領域調整のかかわりを受けたりする中で、個人の権限や自由裁量権の考え方 (文化に普遍) とその内容 (文化に依存) が獲得されるのである (Killen & Nucci, 1995)。

② 文化的文脈と領域調整 (Turiel & Wainryb)

文化心理学では、文化は主観的な経験を構成し、個人の考え、感情と行動を具体化すると仮定する。ある文化にいる人はその文化の志向性を感情や行動の中に反映させている。そして、そ

の文化的な枠組みが意識されることはほとんどない。文化を区別するカテゴリーとして、個人主義と集団主義が最もよく用いられる。個人主義文化の道德は個人の権利や個人の自由を強調するのに対して、集団主義文化のそれは役割に付随した義務の遂行と社会との調和や相互依存の保持を重視する (北山, 1997; Triandis, 1995/2002)。

しかし、文化的文脈は多元的であり、個人の社会的判断と行動もまた多元的である (Trueil, 1998, 2002)。「言論の自由」の概念に関する研究によると、アメリカ人は言論、宗教、集会の自由やプライバシーの権利、個性的なライフスタイルの自由を支持するが、伝統的な思想や公衆利益の維持、公共の福祉などに抵触する自由は支持しない (Helwig, 1995; 長谷川, 2001)。アメリカ人の社会的判断は個人主義的といわれる文化的志向性によって単純に決まるものではない。同様に、集団主義といわれる日本社会の中でも、日本人の判断と行動は集団主義的でもあるし、個人主義的にもなる。日本社会にあっても、子どもは教師や大人の指示・命令を無条件に受け入れることはない。権威者の命令が他者の福祉や正義を犯すときには、5歳の幼児でさえ、それを拒否する。小学生になると、個人的な嗜好や選択に対する権威者の命令にも反発するようになる (首藤・二宮, 2003)。同様な結果は、集団主義的といわれる、また日本以上に儒教精神が残ると言われる韓国においても見出されている (Kim, 1998)。

Wainryb (1995) と Wainryb & Turiel (1994) は Druze という階層社会を舞台に興味深い研究を行った。Druze は 11 世紀早期に形成されたアラブ社会、父系家族、家長制度をもつ階層社会である。女性には就労の禁止、自動車免許取得の禁止、教育の制限など多くの制約がある。婚姻は家長がアレンジする。

西欧では権利は道德性の構成原理だといわれる。Druze のような階層社会では個人の特権や自己決定権は男性、特に家長という地位と役割

に付随した要素である。Wainryb & Turiel (1994) は、Druze 社会において従属的な地位に配置されている女性や子どもに、このような道徳的原理が認められるのかをどうか、認められるとしたらどのような形で存在しているのかを明らかにした。彼らは、Druze 社会の既婚の男女と独身の男子青年を対象に、夫婦、父と息子、父と娘の間の要求の対立場面（「娘・息子の大学進学に父が反対する」「妻の就労の要求に夫が反対する」「夫の転職に妻が反対する」等）を提示し、どちらが決定すべきかの判断とその理由を尋ねた。その結果、次のことが明らかとなった。すなわち、Druze 社会の男女とも、夫は妻に対し、父親は娘に対しより強い権力と権限があると考えている一方、父の権威は息子までは及ばないとも考えていた。それどころか、父の反対があっても、息子にも自己決定権を容認していた。また理由の分析から、Druze の女性は男性の権威と男性の自己決定の自由を合法であると受容する一方で、このような社会的アレンジメントに対し批判的な見方もしていた。対照群としてのアメリカ人女性では男女にかかわらず、意志を持ったものの自己決定を強く支持していた。

このように、Druze という典型的な階層社会であっても、従属的地位に置かれる女性はその役割に付随した従順さを発達させると同時に、支配的な地位の要素であるとされる権利や自由への概念も発達させていた。そして、権利の侵害や不公平という個人主義的文化に典型といわれる道徳的な概念も発達させていた。文化的志向性が一様に個人の判断と行動を形成するのではないこと示した研究である。

4. 個人道徳の発達に関する心理学的研究の方向

最近、相互依存的もしくは集団主義的と特徴づけられることの多い日本社会において、若者たちの思いやり意識が他の集団主義的社会（中

国、韓国、トルコ）の若者と比べて低く、“異質”であることが報告された（中里・松井、1997）。わが国は「自己責任」「危機管理」という個人の自己決定が重視される社会に変わりつつある。また、介護のあり方に関する社会制度の変化に見られるように、個人—家族—社会の関係も変わりつつある（深谷、1995）。社会制度の変化は個人の道徳観や生き方の変化とも関連しているであろう。変化しつつある日本社会の児童青年が自由と義務をどのように意識し、自己と社会との関係をどのようにつくっていくかを明らかにすることは、心理学的に意義があるだけでなく、児童青年の教育を考える上からも価値があると思われる。今後、仮想的な行為に対する善悪判断を扱う研究から脱却し、現実的な社会的関係の中での個人道徳判断、および社会道徳的志向性としての道徳発達を研究する必要がある。

一例として、家族関係における個人道徳場面において道徳的義務感と自己決定感がどのように発達するかを明らかにすることである。家族は依存と自律、義務と責任、愛情と権威といった複雑な要素を持つ対人関係の集合の場である。自律した、あるいは自律しつつある対等な者同士の関係がある一方で、上下関係、主従関係という階層的な関係を存在する。この家族関係において、自己と家族の要求に葛藤のある場面で、どのように自己を発揮するかは重要な個人道徳の問題である。

川島（2000）によると、「考」すなわち親に対する子の恭順・服従の義務はわが国の儒教道徳の基礎であり、特に家族道徳の基礎であった。「考」と「恩」とは表裏の関係、「考」の義務の根拠は子が親から「恩」を受けたという事実に基づいている。「恩」があって「考」が成り立つのである。しかし、戦後、民主化の中で、「考」だけが残り、親孝行という道徳的徳目が子どもに要求されることになった。深谷（1995）も同様の点を指摘している。つまり、「孝行」とは親が苦勞を重ねながら子どもを育て、その親の愛を受けた子どもも親に尽くし、家をもり立てて

いこうと努力を重ねる。これが孝行であり、孝行は親の献身的な愛と一体なのである。

また柏木(2001)は老親扶養の考えを支持するわが国の青年が諸外国と比べて際だって少ないことを報告している。現代においても「親を大切に思う気持ち」としての孝行は対人関係の個人道徳であり続けているだろうが、「自分を犠牲にしてまで親に尽くす態度」としての親孝行は終焉に近づきつつあるといえる。

家族関係の中での献身的行為は個人道徳のひとつである。個人道徳の個人主義的な傾向が強くなることと、献身に価値を置かなくなることは平行している。核家族が普通になり、家族の単位が小さくならうとも、集団としてのまとまりが前提にある。しかし土肥(1999)によれば、この集団としてのまとまりが今や当たり前ではなくなったという。個人は、家族集団の一員であることから、一生のうちに多くの多様な家族、または家族的連携を経験するような方向に変わりつつあるという。これを「家族の個人化」と呼び、「シングル単位社会」の進行を予測している。家族関係における個人主義の増大、献身の軽視の傾向は、この「家族の個人化」とも関連しているだろう。家族の個人化が進むと、家族をつくるのがひとつの生き方の選択となる。これは青年や成人にとっての生き方の変化につながると思われる。

今後、拡大家族、核家族、同居しない夫婦、DINKS 夫婦などを対象に、家族関係での自己犠牲と自己優先の問題を検討してみる必要がある。このような試みは認識論としての道徳発達理論及び研究を超えた生き方としての道徳を理論化するために必要な作業となる。

参考文献

- 東洋(1994) 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて。東京：東京大学出版会。
- 東洋(1997) 日本人の道徳意識：道徳スク립トの日米比較。柏木恵子・北山忍・東洋編、文
- 化心理学：理論と実証、東京：東京大学出版会。(pp. 88-108.)
- Berkowitz, M.W., Kahn, J.P., Mulry, G., and Piette. (1995) Psychological and philosophical considerations of prudence and morality. In M. Killen and D. Hart (Eds.), *Morality in everyday life: Developmental perspectives*. Cambridge, England: Cambridge University Press. (pp. 201-224).
- Bersoff, D.M., and Miller, J.G. (1993) Culture, context, and the development of moral accountability judgments. *Developmental Psychology*, 29, 664-676.
- 土肥伊都子(1999) “働く母親”、多重役割の心理学：個人化する家族の中で。東洋・柏木恵子(編)。社会と家族の心理学。京都：ミネルヴァ書房。(pp. 113-136)
- 深谷昌志(1995) 親孝行の終焉。名古屋：黎明書房。
- Gilligan, C. (1986) もう一つの声：男女の道徳観の違いと助成のアイデンティティ。(岩男寿美子、監訳)。東京：川島書店。(Gilligan, C. (1982) *In a Different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, MA.: Harvard university press.)
- Gilligan, C., and Attanucci, J. (1988) Two moral orientations: Gender differences and similarities. *Merrill-Palmer Quarterly*, 34, 223-237.
- 長谷川真里(2001) 児童と青年の「言論の自由」の概念。教育心理学研究、49, 91-101.
- Helwig, C.C. (1995) Social context in social cognition: Psychological harm and civil liberties. In M. Killen and D. Hart (Eds.), *Morality in everyday life: Developmental perspectives*. Cambridge, England: Cambridge University Press. (pp. 166-200).
- Hoffman, M.L. (2001) 共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで。(菊池章夫・二宮克美 訳)。東京：川島書店。(Hoffman, M.L. (2000) *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. Cambridge, UK.: Cambridge University Press.)
- 市川伸一(2002) 「学力低下」問題と新教育課程。

- 日本教育心理学会主催シンポジウム。新教育課程における学習とその支援—資料集—。(pp.7-11)。日本教育心理学会。
- 柏木恵子 (2001) 子どもという価値：少子化時代の女性の心理。東京：中央公論新社。
- 川島武宜 (2000) 日本社会の家族的構成。岩波書店。
- Killen, M., and Nucci, L.P. (1995) Morality, autonomy, and social conflict. In M. Killen and D. Hart (Eds.), *Morality in everyday life : Developmental perspectives*. (pp. 52-86). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Killen, M., and Smetana, J.G. (1999) Social interactions in preschool classrooms and the development of young children's conceptions of personal. *Child Development*, 70, 486-501.
- Killen, M., and Sueyoshi, L. (1995) Conflict resolution in Japanese social interactions. *Early Education and Development*, 6, 317-334.
- Killen, M., and Turiel, E. (1991) Conflict resolution in preschool social interactions. *Early Education and Development*, 2, 240-255.
- Kim, J.M. (1998) Korean children's concepts of adult and peer authority and moral reasoning. *Developmental Psychology*, 34, 947-955.
- 北山 忍 (1997a) 文化心理学とは何か。柏木恵子・北山忍・東 洋 (編)。文化心理学：理論と実証。(pp.17-43)。東京：東京大学出版会。
- 北山 忍 (1997b) 自己と感情：文化心理学による問いかけ。東京：共立出版。
- 北山 忍・唐澤真弓 (1995) 自己：文化心理学的視座。実験社会心理学研究、35(2), 133-163.
- 児玉 聡 (1999) ベンタムにおける徳と幸福。実践哲学研究、実践哲学研究会。22, 33-52.
- Kohlberg, L. (1984) *Essays on moral development : The psychology of moral development*. San Francisco: Herper and Row.
- Kohlberg, L. (1985) 道徳性の発達と教育：コールバーグ理論の新展開。(永野重史、監訳)。東京：新曜社。(Kohlberg, L. (1971) From is to ought: How to commit the naturalistic fallacy and getaway with it in the study of moral development. In T. Mischel (Ed.), *Psychology and genetic epistemology* (pp.151-235). New York: Academic press.)
- Kohlberg, L. (1987) 道徳性の発達：認知発達のアプローチ。(永野重史、監訳)。東京：新曜社。(Kohlberg, L. (1969) Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research* (pp.37-480). Chicago: Rand McNally.)
- Laupa, M., and Turiel, E. (1995) Social domain theory. In W.M. Kurtines and J.L. Gewirtz (Eds.), *Moral development : An introduction*. (pp.455-473). Needham Heights, Mass: Allyn and Vacon.
- Markus, H.R., and Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Miller, J.G., and Bersoff, D.M. (1995) Development in the context of everyday family relationships: Culture, interpersonal morality, and adaptation. In M. Killen and D. Hart (Eds.), *Morality in everyday life : Developmental perspectives*. (pp. 259-282). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 文部省 (1998) 小学校学習指導要領。文部省。
- 文部省 (1998) 中学校学習指導要領。文部省。
- 村井 実 (1967) 道徳は教えられるか。東京：国土社。
- 中里至正・松井 洋 (1997) 異質な日本の若者たち：世界の中高生の思いやり意識。東京：ブレーン出版。
- Nucci, L.P. (1981) The development of personal concepts: A domain distinct from moral or societal concepts. *Child Development*, 52, 114-121.
- 岡野正賢 (2002) 仏教に「生き方」を探る。東京：春秋社。
- Piaget, J. (1957) 児童道徳判断の発達。(大伴茂訳)。東京：同文書院。(Piaget, J. (1932) *The moral judgment of the child*. New York: Free press.)
- 千石 保 (2001) 新エゴイズムの若者たち：自己決定主義という価値観。東京：PHP研究所。
- 首藤敏元・二宮克美 (2003) 子どもの道徳的自律

- の発達。東京：風間書房。
- Shweder, R.A., Mahapatra, M., and Miller, J.G. (1987) Culture and moral development. In J. Kagan, and S. Lamb (Eds.), *The emergence of morality in young children* (pp. 1-83). Chicago: Chicago university press.
- Smetana, J.G. (1982) *Concepts of self and morality: Women's reasoning about abortion*. New York, NY: Praeger publishers.
- Smetana, J.G. (1995) 子どもは心理学者：〈心の理論〉の発達心理学 (pp. 153-189). (二宮克美・子安増生・渡辺弥生・首藤敏元、訳)。東京：福村出版。(Smetana, J.G. (1993) Understanding of social rules. In M. Bennett (Ed.), *The child as psychologist: An introduction to the development of social cognition*. New York, NY: Guilford Press.
- 高田利武 (1999) 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程：比較文化的・横断的資料による実証的検討。教育心理学研究、47, 480-489.
- 高田利武 (2001) 自己認識手段と文化的自己観：横断的資料による発達の検討。心理学研究、72, 378-386.
- Tisak, M.S. (1995) Domains of social reasoning and beyond. *Annals of Child Development*, 11, 95-130.
- Tisak, M.S., and Turiel, E. (1984) Children's conceptions of moral and prudential rules. *Child Development*, 55, 1030-1039.
- Triandis, H.C. (2002) 個人主義と集団主義：2つのレンズを通して読み解く文化 (神山貴弥・藤原武弘 編訳) 京都：北大路書房。(Triandis, H.C. (1995) Individualism and collectivism. Boulder, Co: Westview Press.)
- Turiel, E. (1983) *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Turiel, E. (1989) Domain-specific social judgments and domain ambiguities. *Merrill-Palmer Quarterly*, 35, 89-114.
- Turiel, E. (1998) The development of morality. In W. Damon (Ed.), *Handbook of child psychology, 5th Ed., Vol. 3: N. Eisenberg (Ed.), Social, emotional, and personality development*. (pp. 863-932). New York, NY.: Wiley.
- Turiel, E. (2002) *The culture of morality: Social development, context, and conflict*. Cambridge, England: Cambridge university press.
- Turiel, E., Hildebrandt, C., and Wainryb, C. (1991) Judging social issues: Difficulties, inconsistencies, and consistencies. *Monographs of the Society for Research in Child Development*. 56 (2, Serial, No. 224).
- 内田由紀子・北山 忍 (2001) 思いやり尺度の作成と妥当性の検討。心理学研究、72, 275-282.
- Wainryb, C. (1991) Understanding differences in moral judgments: The role of informational assumptions. *Child Development*, 62, 840-851.
- Wainryb, C. (1993) The application of moral judgments to other cultures: Relativism and universality. *Child Development*, 64, 924-933.
- Wainryb, C. (1995) Reasoning about social conflicts in different cultures: Druze and Jewish children in Israel. *Child Development*, 66, 390-401.
- Wainryb, C., and Turiel, E. (1993) Conceptual and informational features in moral decision making. *Educational Psychologist*, 28, 205-218.
- Wainryb, C., and Turiel, E. (1994) Dominance, subordination, and concepts of personal entitlements in cultural contexts. *Child Development*, 65, 1701-1722.
- 山岸明子 (1995) 道徳性の発達に関する実証的・理論的研究。東京：風間書房。

(2004年9月30日提出)

(2004年10月15日受理)

Personal-Moral Issues as a Multifaced Domain : Its Conceptions and Future Directions for Psychological Research

Toshimoto SHUTO and Katsumi NINOMIYA

Key word : moral development, moral judgment, social domain theory, cultural psychology

Everyday social judgments and behavior are the result of a coordination of concepts from three domains : moral, social, and personal (Turiel, 1998). Whereas there may be few cultural differences in these concepts themselves, their unique coordination might produce large differences in different cultures (Turiel, 2002). Social behavior in everyday life are not decided by one concept from one domain, but rather they are dependent on a balance between respecting individual freedom and rights, and welfare of others. For example, caring for one's family, volunteer activities, and consideration for others, are all based on the same moral elements : influencing the happiness and welfare of others. They are also behavior for which an individual's need should be respected. Situations involving individual freedom, the right of self-determination, and socio-moral factors are defined as personal-moral issues. Personal-moral judgments are considered to reflect moral consciousness leading to good relations between the self and the society, or to positive interactions between the self and the social world. In this article, social domain theory about moral development and empirical researches about the moral judgment in the cultural context are reviewed. The directions of the psychological research about the personal-moral issues are discussed.